（第２号様式）

神奈川県教育委員会教育長　殿

令和６年　３月　31 日

県立　城郷高等学校長

令和５年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標 (令和２年度策定)	１年間の目標	取組の内容		校内評価（中間報告）		学校関係者評価 （10 月 31 日実施）	総合評価（１月 26 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①新学習指導要領への移行と、インクルーシブ教育実践推進校としての取り組みを主軸に、系統的な教育課程を構築する。 ②「主体的・対話的な深い学び」を追求した授業実践を組織的に積み重ね、「自ら学び続ける生徒」を育てる。	①新学習指導要領の実施に伴い、インクルーシブ教育としての「主体的・対話的で深い学び」を意識し、教育実践に反映させるとともに、すべての生徒の実態を踏まえた教育課程を構築する。 ②「シチズンシップ教育・人権教育」についての実践研究を活かした授業改善により、生徒の主体的な学びの力を育む。	①カリキュラム WG を設置し、教務情報 G と協働しながら学校全体や生徒の将来像を見据えた教育課程を再編する。1 人 1 台 PC を活用し、個別最適な学び方、教材を提示する。 ②学年行事や授業を通して地域理解を深め、自らの政治参加意識を高めさせる。また自他を敬愛する心を持ち続けることの大切さについて考える授業を実践する。	①各教科からの要望を時間割や講座数・人数に反映させることができたか。1 人１台 PC の活用状況や内容を教科や学年ごとに調査し、授業評価の項目７の 3.4 の割合が 70%以上を継続できたか。 ②主体的な活動によって、政治参加意識や人権意識を高めることができたか「シビックプライド」を用いて検証する地域への愛着スコアが 6.0 以上になったか。	①各教科・科目と進捗状況を共有しながら、作成することにより、適切な時間割や TT 配置を行うことができた。１人１台 PC の活用率は上昇してきているが、その内容等を周知するための教員対象のアンケートを実施し、更なる向上を目指している。 ②各学年での遠足や授業、定期試験などで「横浜」を意識させ、地域理解や地域の一員である意識を高めている。また、日々の指導の中で、他者に対する思いやりについて主体的に考えるよう指導している。	①生徒の授業中の様子を参考にして、連携生徒が苦手となりがちな科目を優先的に TT 授業とする。PC については、活用状況の更なる向上を図るため、他校の実践報告を紹介したり、各教科で取り組みを考えられるような機会を設定したりする。 ②学年により取組の進度に差があるので、最終的に濃淡のないようにしていく。 生徒が主体的に学び続けられるよう、授業改善を続けていく。	・１人１台端末の活用状況はあがっているが、各生徒の習熟度の差や生成 AI などの対応が必要となってくる。 ・自校での実践報告会や相互の授業観察などの推進を期待する。 ・授業評価による達成状況や課題等を早急に改善できる体制づくりをお願したい。 ・「横浜」をテーマにした授業に取り組んでいることは、非常に評価できる。 ・生徒が主体的に日頃のニュースや社会の動きに目を向ける機会を設定してほしい。	①１人１台端末を板書やワークシートと併用し、要所で効果的に活用することを目標に授業改善に取り組み、生徒の主体的・対話的な学びにつなげることができた。授業の相互見学による教科研究には課題を残した。 ①教育課程編成は、各教科と協議し、効果的な時間割や TT の配置をすることにより、授業効率を高めた。また、自由選択科目の充実により、科目選択の幅が広がり、進路に対する意識向上につながった。 ②学年行事や授業を通して地域の一員である意識を深め、政治参加意識も高めさせることができた。 ３年生対象の模擬投票事前アンケートでは、75%の生徒が「選挙機会があるときは投票に行きたい」と答えている。現在、「シビックプライド」を用いた検証では、スコア 5.9 であった。	①特別募集生徒を含めた全生徒の学年ごとの実態を把握し、生徒が苦手意識をもっている科目に TT を配置して、学習支援体制を整える。１人１台端末については、より効果的な活用方法を実践するため、他校の報告を参考にしたり、研修会等に参加したりする。また、特別募集生徒への更なる支援として、芸術科目において、新たに TT を配置することにより、学習環境を整える。 ②来年度が「シチズンシップ教育指定校」３年目、「人権教育指定校」２年目となる。より実践的に政治参加意識が高まる授業や、人権を意識した授業が教科横断的に展開できるよう、全教員に働きかけ、学校全体で取り組んでいく。
2	（幼児・児童・）生徒指導・支援	①安全・安心な学校生活を保障するとともに、すべての教育活動を「支援」の観点に基づいて検証・改善していく。 ②生徒の自己表現・自己実現の機会を充実させ、協働と成功体験の積み重ねによる豊かな人間性を育む。	①授業を大切にする態度を育成するとともに、自他を尊重した、「生き方」「在り方」を育ませる。更に、生徒のため、教育相談体制を充実させる。 ②生徒が主体的に企画・運営を実施できる学習機会・学校行事を検討・提供していく。	①正装指導を柱に基本的生活習慣の確立を図る。複雑化・多様化する生徒指導・教育相談に対して SC・SSW と連携しながら支援の要素を含めて考え、教育相談体制の再構築を図る。 ②計画的な生徒会活動、委員会活動を促すことで、生徒の発想を引き出す場を設定する。	①正装に対する意識の向上が式典関係や定期テストの際のチェック表に現れたか。生徒指導・教育相談に対して SC・SSW と連携し生徒・家庭・教員の三者が最適安心な支援ができたか。 ②学校行事の企画運営に関わり、満足できる生徒が 85％以上になったか。	①正装に対する意識はでチェック表の数字からも向上していると考えられる。SC・SSW については、今後サポートドックの運用・活用方法等を検討し、生徒がより安心して学校生活を送れるよう進めていく。 ②体育祭では、委員会、部活動生徒中心に 30％以上が運営に関わり、92%の生徒が満足し充実感を得たと回答した。	①正装指導を中心に TPO に合わせて身だしなみを生徒が主体的に考えられるように発展させたい。多様な指導・支援に対応できるよう新たな体制を考え確立したい。 ②文化祭、球技大会では運営に携わる生徒の割合を 50％以上になるようクラス・委員会活動を活発化さし、生徒の発想を引き出す。	・正装指導の効果があがっていると思われるが、本来は家庭で行うものではないかと感じている。 ・城郷高校の支援体制（情報交換会議）は、非常に有効活用されていることに感心する。今後、サポートドックとの運用・活用に期待している。 ・学校行事等の運営に係る生徒の満足度が高まったと思う。 ・将来、世の中で自身が参加できる方法を、考えさせる必要がある。	①職員の共通理解のもと、生徒に「正装」を意識させることで、場面に合わせた身だしなみの大切さを伝えることができた。 ①今年度、新たな支援の形として「かながわ子どもサポートドック」が導入された。時間の制約がある中で、丁寧に対応し、生徒の支援につなげることができた。SC、SSW の有効活用も含め、教育相談体制の再構築が必要とされる。 ②文化祭において、クラス企画を中心に、運営に携わる生徒の割合が 88%、行事に対する充実感を得た生徒の割合が 90%強という結果となった。球技大会においては、生徒が主体的に行動する様子が見られた。参加するだけから、生徒自ら企画運営する行事の実現に近づけることができた。	①今後、学校生活全般における基本的な生活習慣の重要性を生徒が主体的に考えられるよう、支援・指導の方向性を整える。 ①かながわ子どもサポートドックが計画的かつ効果的に運用できるよう検討を重ねる。また、教育相談コーディネーターを中心とした教育相談体制を確立し、養護教諭、SC、SSW との連携を強化し、生徒の支援につなげていく。 ②コロナ禍を経て、生徒会や実行委員会等の生徒が運営の中心となった新たな学校行事のスタイルを確立させ、生徒の満足度や達成感を向上させる。また、保護者や地域住民、中学生などの来場者の視点を意識した安全安心な学校行事の検討が必要とされる。
3	進路指導・支援	①「キャリア教育」の視点に基づいた進路支援とカリキュラムマネジメントに取り組む。	①インターンシップ、体験的なプログラム等に積極的に参加するよう、働きかける。また、教科活動の中でスタディサプリ等外部プログラ	①将来の職業イメージを描き自己実現を考えた進路選択を導く。スタディサプリの活用を促し年２回の到達度テ	①キャリアガイダンスに参加し進路選択への意識（大学進学率 60%以上）が高まったか。スタディサプリ、外部	①インターンシップ 79 名が参加した。到達度テストを実施し、1 年は昨年度よりスコアーが高かったが、２年は、1 年時より下降した。３	①インターンシップ等に自主的に参加する生徒を拡大させていく取り組みを検討する。参加した生徒が学校生活の中で経験を	・インターンシップに参加した生徒数を増やすだけでなく、生徒たちの経験したことを、共有や意見交換ができる場の設定も必要ではないか。 ・大学進学率を高めるこ	①特別募集生徒のインターンシップを含む体験的なプログラムへの参加状況は、100％達成した。今後は、情報共有・発表の場の設定等を検討していきたい。 ①さまざまな職種の社会人講話を設定し、進路選択について考える	①インターンシップや仕事の学び場へ参加した後の振り返りについて、報告会や感想文など、全体の場で発表できる機会を工夫する。 ①進路ガイダンス等の取組や３年間の流れを全学年で構築して

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価（中間報告）		学校関係者評価 （10 月 31 日実施）	総合評価（１月 26 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
		②系統的な進路支援体制の構築とともに、個別支援を充実させ、一人ひとりのニーズにかなった進路実現を目指す。	ムを積極的に活用し、学習の定着と家庭学習の習慣化を図っていく。 ②生徒の個性や進路意識の段階を踏まえ、個に応じたキャリア教育を推進し実践する。キャリア教育の視点を生かした教科指導、特別活動の指導内容等を研究する。	ストと外部模試を併用し進路選択の幅を広げていく。 ②生徒との面談や相談に対応できる環境を充実させ、キャリアガイダンスや上級学校訪問などの企画運営を研究し実践する。	模試の平均値 C3 が B3 に上がったか。 ②二者面談や進路室の活用を促し個々の相談に対応できたか。上級学校訪問や模擬授業、社会人講話を年 10 回以上企画実施することができたか。	年の実力診断テストでは、大学進学希望 46%、専門学校希望者 36%であった。 ②進路室での相談を充実させ上級学校での説明会資料をまとめ変更点など情報を伝達した。	生かす場の設定を構築する。 １・２・３年共に８月後半に実施する。 ②模擬面接を校内全体で実施し、結果に結び付けていく。また、学校行事に参加した体験等をまとめキャリアパスポートを作成していく。	とは大切だが、個々の希望する進路のサポートが重要である。 ・進路指導については、情報提供だけではなく情報の精査方法や分析方法についても取り入れることが大切である。	機会を設けた結果、大学進学希望者が 65%と進学意識の上昇傾向につながった。しかし、学習到達度テストの結果を検証すると、全体的に数値の向上は見られず、今後の課題となった。 ②生徒のキャリア発達に関する企画は 10 回以上実施することができた。ただし、進路室を十分に活用する生徒は少なく、次年度に向けて活用方法を検討していく。	いく。また、多様化していく学校推薦型入試、総合型選抜入試の情報を共有できるシステムを構築する。その分析結果をもとに個別面談を実施するとともに、一般受検に向けた外部模試を充実させ、生徒の志望校を意識した働きかけをおこなう。 ②進路室の有効活用を考えるとともに、キャリア担当者からの情報を、具体的な内容として発信する。模擬面接指導では指導後の報告などレポート提出も含め、支援を強化する。
4	地域等との協働	①地域・保護者への情報提供を充実させ、学校運営協議会を通じた協働的・双方向的な学校づくりを推進する。 ②地域への貢献と、地域資源の活用を両立させ、地域とともに育ち、地域とともに伸びる学校を目指す。	①本校の教育活動について、保護者や地域に向けて、より広く情報発信に取り組む。 ②地域、大学、専門学校、企業、行政機関 等との協働連携を促進し、本校の教育力の向上を図る。	①シチズンシップ教育研究指定校として、地域連携を含んだ学習活動を特集として取り上げ、発信していく。また、地域中学校が開く個別の学校説明会に積極的に参加していき、本校の活動内容を発信する。 ②高大連携校との交流をより密にし、生徒の上級学校への進学意識を向上させる。	①シチズンシップ教育関連の内容を HP で毎月更新できたか。地域中学校から依頼があった個別学校説明会に３回以上参加することができたか。 ②高大連携校から講師を派遣してもらい、模擬授業や体験授業を開催できたか。	①シチズンシップ教育関係の内容を HP に挙げられていない。地域中学校の学校説明会へは、依頼のあった中学校に参加した。今後も依頼のある中学校へは、進んで参加していく。 ②８月に新たに専修大学と高大連携を結び、生徒が大学の授業を聴講することや図書施設を利用できる体制を整えた。	①シチズンシップ担当教員のみでなく、複数体制での対応を心がけ、今までの活動を含めた内容を早急に上げるとともに更新状況を確認する。昨年度作成した個別説明会用の映像資料をブラッシュアップする。 ②生徒が高大連携校との交流が進むよう情報提供を HP 等に配信していく。	・学校説明会でのシチズンシップ教育に関する情報発信は効果的ではあるが、教員の多忙さに拍車をかける可能性があるため業務量の調整が必要と感じる。 ・地域の中学校に出張説明会に参加していることは、地域との協働に大いに貢献している。 ・専修大学との高大連携を結んだことは大きな成果だと思う。 ・大学での授業の聴講や、図書施設を活用した生徒が、感じたことを共有できる場が必要であろう。	①地元企業とのコラボや地元特産物を活用した授業を展開することができた。また、地域の問題点を探し、実際に解決策を市役所・区役所に提案していく請願権の学習もおこなった。 ①地域中学校からの進路説明会への参加依頼に対して可能な限り応えることができた。また、学校説明会に参加できなかった地域の中学生・保護者へは見学の機会を設けるなど、柔軟に対応した。 ②専修大学と高大連携協定を締結したことにより、県内上級学校との教育連携は充実した。その結果、生徒の上級学校への関心が高まり、進学者の増加につながった。	①「地域を知る学習」については、各教科で、さまざまな取り組みがおこなわれた。今後は、シビックプライドを高めるような学習に比重を置きたい。また、活動実績等を積極的に HP 等で発信していく。 ①中学校主催の進路説明会へは、今後も積極的に参加し、学校の特色をアピールしたい。また、学校紹介映像を新しく作成し、見てわかりやすい学校紹介とする。 ②県内の大学や専門学校との教育連携は進んでいるが、キャンパス見学や授業の聴講、図書館利用といった具体的な活用方法を生徒に提供することが求められる。
5	学校管理 学校運営	①UDL の観点に基づいた検証を全教育活動について行い、すべての生徒にとって学びやすい環境を整えていく。 ②「スクラップ＆ビルド」の観点で業務を見直し、「働き方改革」を新たな創造に結びつける。	①UDL の観点に基づいた授業づくり、環境づくりを行い、すべての生徒にとって安全・安心な学習環境を整備する。 ②円滑で効率的 な学校運営に取り組むとともに、教員が健康で働きやすい職場づくりを進める。また、不祥事防止について教員の意識を高める。	①フロントゼロやホワイトボードを利用した情報提供、各教科の特性に応じた UDL の観点に基づいた授業など、すべての生徒にわかりやすい環境をつくる。 ②各学年に支援リーダーを配置し、支援担任の業務のとりまとめやフォローを行う。	①誰にとってもわかりやすい情報提供がなされたか。UDL の観点に基づいた授業ができたか。授業評価アンケート項目８の 3.4 の割合が 80％を超えたか。 ②週１回の支援担任会議以外に、支援担任オリエンテーションができたか。不祥事防止のための情報を、全職員で共有できたか。	①各 HR 特別教室でのフロントゼロは、ほぼ達成できている。また、ICT 機器を利用した授業が全体的にも進んでおり、UDL の観点に基づいた授業展開の一例と言える。 ②支援リーダーを中心に支援担任会議を行い、支援が必要な生徒について情報共有を行うとともに、担任・教科担任とも連携を図っている。	①ホールに設置しているホワイトボードに書く内容を工夫し、「より分かりやすく、シンプルに」を実践する。また、ICT 機器の点検を行い、不具合のあるものは早めの対応をする。 ②特別募集生徒の情報について、支援担任が中心となって個別教育計画に反映できた。特別募集生徒以外の支援が必要な生徒についての枠組みの構築を検討していく。	・ICT 機器を活用した授業が進んでいると感じる。 ・UDL の観点に基づいた授業をこれからも進めてほしい。 ・各教員が授業実践を前向きに共有し、話し合う文化にしていく学校づくりを期待する。 ・特別募集生徒以外の支援が必要な生徒が、今後も増えてくると思われる。そうした生徒たちにできる支援体制の構築をお願いしたい。	①授業における ICT 機器の活用は着実に進んでおり、UDL の観点に基づいた授業展開については一定の成果があがっている。また、各階の学年ホールでは、ホワイトボードや掲示物等を活用して、生徒の学習意欲を高めるような工夫を試みた。ICT 機器の不具合等には、今後も円滑な修理・交換等の対応が必要となる。 ①授業評価アンケート項目８の「わかりやすい授業である」に該当する３．４の割合が 78.8%であり、目標である 80%を超えることができなかった。 ②支援リーダーを各学年に配置したことで、支援担任への指示や連絡、情報共有などがスムースに行われるようになり、きめ細かな生徒支援及び効率的な業務改善につなげることができた。	①ICT 機器を利用した授業方法がやや固定化してきたことから、教員同士が積極的に授業を見学し合うことで、授業改善を図る必要がある。併せて、ICT 機器の修理・修繕費の予算割当を、できるだけ早期に対応する。 ①授業評価アンケートの結果や生徒の声を受けて、本校生徒にとっての「わかりやすい授業」とは何かを各教科で検討し、授業の最適化を図ることで、満足度を向上させる。 ②「特別募集生徒」への支援と、「一般募集で支援を要する生徒」への支援をどのように分担し対応していくかを協議する必要がある。